

## 小学校での平和教育実践

高見 祥一

### 1. はじめに

小学校における平和教育実践とは、教師が実践者となり、授業、行事、学級活動など小学校教育の場で、平和形成者を育てることを目的として行う活動である。小学校における平和教育実践の目標は、平和な社会をつくろうとする意欲を持ち、その実現のために必要な理解力、思考力、実践力の基礎を身につけることである。

小学校での平和教育実践は二つに大別できる。一つは授業や行事など学習場面における平和教育、もう一つは学級経営や生活指導などにおける、学習場面を特定しない平和教育である。後者は平和な心を育てるという意味で教育一般と区別できず、対象が広すぎるので、ここではとりあげない。

### 2. 教科や道徳の学習としての平和学習

教科や道徳においては各学年段階の指導内容が学習指導要領において規定されている。教科や道徳の学習として平和学習を行う場合は、その学習内容をふまえて行うことになる。

#### <読み物>を用いた平和学習

子どもが授業の中で児童文学作品、絵本、詩、体験記などの<読み物>に出合うことで平和について考えるという平和学習は広く行われている。出合わせ方としては、印刷物を配布して読ませる、読み聞かせる、音読させるなどの方法がある。紙媒体の印刷物だけでなく、視聴覚教材を用いる場合も含まれる。ドラマ、映画、アニメなどの録画媒体を再生して視聴させるものである。

いずれの教材も授業する教師が意図して選定し、与える。教科書に掲載されているとしても、それを平和学習の教材として取り扱うのは授業者の意図による。

#### (1) 国語科の教材としての<読み物>を用いた学習

国語科で文学教材の学習として平和学習をする場合は、文章表現として記述されている登場人物の心情などのことがらを正しく読み取ることで、そこに描かれる戦争を体験させるのが学習のねらいになる。それゆえに作品の持つ戦争観や平和観が学習の効果を規定する。被害者的な立場からのみ記述している作品からは、被害者の視点しか学べないことが多いであろうし、被害・加害・協力・加担など、多様な視点を持つ作品からは多面的な見方を学ぶことができるであろう。ただし、授業者がそのような視点を欠く場合は、それはできない。

#### (2) 道徳の資料としての<読み物>を用いた学習

<読み物>を道徳資料として扱う場合には、子どもたちが理解しやすいように読み聞か

せたり、文章を読むよりも平易な絵本や紙芝居、映像といったより視覚的な資料を用いたりすることが多い。この場合でも登場人物に共感させることがねらいになることが多いので、学習する子どもが共感しやすい<読み物>を選ぶことが大切である。

このタイプの学習は、多くの場合、子どもに感想を書かせて終わる。<読み物>から発せられたメッセージは個々の子どもの胸に届いても、そこまでである。そこからさらに深めるためには、個々の感想を読み合ったり聞き合ったりして意見交換したり、感想に共通する問題点について討論したりする方法がある。その問題を考える手がかりになる別の<読み物>を紹介する方法もある。いずれにしても、単なる「感想」に終わらず、意見や主張、または考察にまで高められるように指導することが<読み物>の発するメッセージに答えることになるであろう。

### 社会科の学習としての平和学習

#### (1) 近現代の日本の歴史の学習として

小学校では日本の歴史を6年生で学ぶ。時間数の制約があるので、明治以降の戦争の歴史を授業でつぶさに扱うのは難しい。しかし、条約改正、文明開化、富国強兵などをキーワードに、戦争への道を歩んだ歴史を学ばせることはできる。なぜ戦争に向かって進んだのかを考えさせる平和学習は、社会科において可能である。

#### (2) 地域の昔のようすの学習として

中学年で地域の昔について学ぶとき、地域における戦争被害や戦時下の暮らしの様子について学ぶことが出来る。戦争を身近に感じ、自分につながる問題として平和を考えるきっかけとすることができる。

### その他の教科での平和学習

それ以外の教科でも、次のような平和学習をして、戦争や平和について、知識を与えたり、考えようとする意欲を育てたり、心情的な理解を深めさせたりすることができる。

(1) 国語科では、先述の文学教材の読み取りのほかに、書く領域での平和学習がある。作文、詩、短歌などの作品として平和への思いを表現する活動や、ディベートなどの話し合い活動を通じて平和宣言や平和メッセージを共同でつくりあげる活動をすることもできる。

(2) 算数の「大きな数」で、「万」の位の学習をするとき、一万人の顔写真を集め、広島・長崎の被爆者数を想像してみる。「単位あたり量」の学習で日本全体と沖縄県民の基地負担面積を比べる学習をする。

(3) 理科では、水の沸点と原爆の温度を比べてみる、環境の学習で放射線について学ぶ。

(4) 音楽では、「お母さんの木」「ちいちゃんのかげおくり」などのオペレッタへの取り組み、「HEIWAの鐘」「地球星歌」などのメッセージ的な合唱、沖縄民謡への取り組みなどができる。

(5) 図画工作では、平和への思いを絵画やポスターや立体作品に表現する制作活動や、「ゲルニカ」など戦争関連画の鑑賞などを行う。

(6) 家庭科では、アジア太平洋戦争の戦時下における耐乏生活を学んだり、当時の食事を再現してみたりすることができる。

(7) 体育では、エイサーから沖縄戦の学習につなげたり、ダンスや組み立て体操に、戦争への怒りや平和への思いを表現したりする。

このように各教科で平和学習を行うことができるが、教科学習における平和学習では、教科の学習目標の達成をおろそかにすることはゆるされない。教科としての内容をしっかりおさえた上で、平和教育としての内容を設定して実践しなければならない。

### 3. 総合的な学習の時間での平和学習

総合的な学習のやり方には、二つのタイプがある。

#### (1) 教科の学習を発展させる総合的な学習

社会科での平和の学びを発展させて、調べ学習をし、人前で発表したり、展示作品にまとめたりする。また、国語科の文学教材で、読み取りだけにとどまらず、個々の読みに基づいて作品化して発表したり、文集を編んだりする。教科の学習では受け身の姿勢のままでも学習は成立するが、総合的な学習の時間の活動では、子どもが主体的に動くことが常に求められる。

#### (2) テーマを特設する総合的な学習

例えば「平和」をテーマにして、総合的な学習の単元を組む。戦争体験を聞いたり、地域に関連する戦争を調べたり、平和資料館を訪問したりして、子どもたちがテーマに出会う。それについて、さらに調べたり、討論したりして、自分の考えを持つ。そして、発表会や作品化をして自分の考えを表現し、伝える活動をする。表現する活動の場合、国語、図工、音楽、体育などの教科と合わせて、合科的な大きな単元として平和学習を展開することもある。

このタイプに含まれるが、修学旅行という行事を中心にして単元を構成する実践がよくある。広島や長崎に修学旅行で行き、現地で平和学習を行う。平和資料館見学、追悼セレモニー実施、体験談の聞き取り、碑めぐりなどがおもな活動である。修学旅行当日の活動だけでなく、事前学習として原爆について学んだり、慰霊のために捧げる折り鶴や作品を制作したりする。帰校後には、現地での学習の成果などをまとめ、報告会や発表会を開くなどの活動を行う。こうした学習では、数ヶ月から半年、長いときには卒業まで続くような1年間の大きな単元になる。

いずれのタイプにせよ、「総合的な学習の時間」に位置づけた平和学習の時間であれば、問題解決力や調べ学習のスキル、表現や発信の力など、平和を形作る力を子どもたちに身につけさせることができるであろう。

#### 4. 行事における平和学習

修学旅行については先述したとおりであるが、実施学年の6年生だけでなく、修学旅行をメインにした全校平和集会在行事として定着している学校がある。他学年でも、集会の前後に子どもの発達段階に応じた平和学習をする。絵本や視聴覚教材の鑑賞をしたり、6年生の千羽鶴づくりに参加したり、メッセージを託したりなどの活動がある。

他方で、日帰りの遠足的行事で平和学習を行う場合もある。修学旅行の目的地が広島以外の学校が近く平和資料館訪問などの活動をする。訪問の前後にさまざまな活動が展開できるのは、修学旅行と同様である。また、原爆投下の日や沖縄慰霊の日に合わせて平和登校日を設けている学校もある。学校行事として設定すれば、平和教育の取り組みが広がる。

#### 5. 特別活動、課外活動における平和学習

平和について学び、考えた子どもたちは、表現の場を与えられれば意見を表明し、発信するようになる。さらに、深く感じ、考えた子どもたちは思いを伝え、行動する場を求めるようになる。教師がそれを規制する側に回らず、子どもの思いや行動を支援する側に回れば、小学生でも発信したり行動したりすることは可能になる。

この支援には3つの注意点がある。まず、その発信や行動に価値を持たせることである。子どもなりに真剣に考え一生懸命にやっているのだと、多くの人の理解と評価が得られるようなものに高める指導が必要である。次に、安全性の確保がある。教師が責任を持って活動の場に立ち会うのはもちろんのこと、管理職や保護者の理解と協力を得て、多くの目で見守る体制が必要である。また、一人一人の子どもの意思の確認も欠かせない。多数決の論理で、やりたいと思わない子にまで行動を強制しない配慮が必要である。

平和学習に起因した活動として、4年生の子どもたちがフランスの核実験への反対署名を街頭で集めたり、アフリカの子どもたちにおもちゃを送る活動に協力したりした例や、アフガニスタンの子どもたちへの募金を街頭で集めた例がある。広島修学旅行で学んだことから行動を起こし、平和文化祭として展示と紙芝居、演劇の上演で平和をアピールし、被爆者や支援が必要な海外の子どもたちへの募金、地雷除去活動への募金、古着の送付などを行った6年生の例もある（高見 2005）。

#### 6. まとめ

平和教育の入門期においては、学習者が戦争という事象に出合う場を設定することが平和学習になる。戦争を知らなかった子どもたちは平和学習で戦争になったらどんなことが起こるかを知り、その被害を受けた人たちの悲しみや苦しみへの共感的理解を促したい。それによって、戦争はいやだ、という気持ちを持つ。さらに戦争という状況下での人々の姿を学ぶことで、被害面だけではない、人間の醜さや不合理性にも気付き、戦争をしてはいけない、戦争はだめだ、という気持ちを持つようになる。その気持ちは、それなのにな

ぜ戦争になるのかという疑問につながって戦争のメカニズムを考えようという意欲になる。一方で、その気持ちはそんな戦争をなくそう、戦争が起きるのを防ごうという姿勢にもつながっていく。

今の子どもたちのように戦争から遠く離れた世代になると、文章や作品の中にあるだけの戦争との出会いでは、平和について考えさせる力はあまり強いとはいえない。戦争というものを身近に感じさせるために、世界における現代の戦争やその影響に目を向けさせたり、身近な地域と過去の戦争との関わりに気づかせたりするなどのくふうが必要になる。過去の戦争を描いた<読み物>を用いる場合でも、学習者と主人公の年齢が近いものを選んだり、感情移入しやすい動物が登場する物語を使ったりするほうが効果的であろう。

また、平和学習のあり方自体、体験した者やよく知っている者が体験のないよく知らない者に教え伝えるという形態を変化させていくべき時期に来ている。戦争体験のない教師が、子どもとともに戦争と平和について学び、気づき、考え、伝えていくという形態が必要である。小学校では、発達段階および教育指導要領に規定された学習内容に限度があるので、関心・意欲の育成を重視した実践になるが、子どもたちに平和をつくる姿勢の素地を培っていく平和教育実践が求められている。

## 参考文献

- 高見祥一（2002）「平和な社会をつくろうとする子どもたち—アフガニスタン子ども募金にとりくんで」『解放教育』No.416
- 日教組平和学習冊子編集委員会（2001）『総合学習の時間に生かす これが平和学習だ!!』アドバンテージサーバー
- 兵庫教育文化研究所平和教育部会（2011）『つながりのなかで』
- 村上登司文・高見祥一（2014）『平和教育の授業づくり 戦争を知らない教師が平和教育をどう行えばよいか』京都教育大学教育社会学研究室